

研究ノート

ソーシャルワークの展開過程についての検討

A study of social work process

岩間 文雄

要約：ソーシャルワークの展開過程は、その特徴や段階の区切り方について文献ごとのとらえ方の幅がある。本論では、特にソーシャルワーク統合化の一つの到達点であるジェネラリスト・ソーシャルワークを中心とした、現代ソーシャルワークの枠組みにおける展開過程の特徴、構成要素について、文献の概観を通して、論者ごとの共通点と差異について整理を行った。文献からいえることは、ソーシャルワーク展開過程の特徴は、非線形、円環的、螺旋状等、様々な表現を用いられ説明される、「進行しながらも巡り巡って元の段階に立ち戻ることがある」性質、展開過程を構成する段階は、実践においては明瞭に区分することが難しいといった性質があるとされていることである。また、「局面」「段階」等と呼ばれる、ソーシャルワークの展開過程を形成するための構成要素の区切り方は、3区分から8区分まで様々なバリエーションがあることが改めて確認された。展開過程の構成要素をどのようにとらえるかについては、特に入り口段階を「インテーク」とするのか、「エンゲージメント」とするあるいは「アセスメント」から開始するのかといった入口のとらえ方の違い、また「モニタリング」や「フォローアップ」を独立した段階として取り扱うかどうかといった点において、特に日本の文献と欧米の文献との間にはっきりとした違いが見られた。本論における検討は、ソーシャルワーク展開過程の大まかな特徴と段階の区切り方に焦点を置いたので、詳細な内容の吟味にまでには至っていない。それらは、今後の課題とした。

Key Words：ソーシャルワークの展開過程、ジェネラリスト・ソーシャルワーク、構成要素

I. はじめに

ソーシャルワークは、人と環境の交互作用に働きかけ、生活上の問題を抱えるクライアントの状況をよりよく改善する手助けを目的とした専門職の援助実践である。その具体的展開にあたって、効果的・合理的に援助を展開する上で、ソーシャルワークの援助展開に関する理論的枠組みは、実践者にとって欠かすことができない。例えば、登山者が目的地にたどり着くという目的を達成するために方位が記された地図が欠かせないように、プロセスについての理論的枠組みは、ソーシャルワーカーとクライアントの協働によるソーシャルワークをどんな手順で展開し、各段階においてどのような内容の働きかけを行う必要があるのか検討するための思考の基盤を提供してくれるものである。しかし、ソーシャルワーク実践に関する文献のレビューを通じて分かることは、ソーシャルワークの展開過程の枠組みについての解説は、大枠において本質的な特徴は共通しているものの、細部や段階の区分については研究者ごとに多くの相違点があるとい

う現状である。そうした文献によって異なるソーシャルワーク展開過程の枠組みについて検討し、整理を試みる。

本論では、ソーシャルワークの展開過程の理論的枠組みに着目し、文献研究を通じてその性質と構成要素について検討することを目的とする。以下、II. では、ソーシャルワークの展開過程を検討するうえで前提となる、ジェネラリスト・ソーシャルワークの成立背景と概念について整理する。III. ではソーシャルワークの展開過程の特徴と構成要素について文献ごとの解説を比較し、それぞれで共通する点と異なる点を明確にしていく。IV. では、ソーシャルワークの展開過程の理論的枠組みにおけるバリエーションについて分析を深める上での課題について述べる。

II. ソーシャルワークの今日の枠組みについて

1. ジェネラリスト・ソーシャルワークの体系化

本題の検討に入る前に、必然的にソーシャルワーク統合化の背景と、今日のソーシャルワークの代表的な理論と位置付けられるジェネラリスト・ソーシャルワーク概念について触れておく必要があるだろう。本論でいうソーシャルワークとは、ジェネラリスト・ソーシャルワー

クを中心とした枠組みを想定している。ジェネラリスト・ソーシャルワークの理論は、日本におけるソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士・精神保健福祉士の養成課程のカリキュラムにおいて位置づけられる「相談援助」の理論と方法に大きな影響を与え、大枠において重なっているからである。

ジェネラリスト・ソーシャルワークは、言葉の指す内容や用語の用い方は完全に統一されておらず、バラツキがあるといわれている。太田の著作『ジェネラル・ソーシャルワーク』では、「ジェネラル・ソーシャルワークとは、グローバルな視野で錯綜した生活や環境を捉える時代の要請が生みだした包括的・統合的な発想や視点」であり、「この概念は、現在のところまだ確立した固有の理論や、それに基づくモデルやアプローチを意味するものにまで成熟してはいない。」(太田 1999: 17)とされていた。また、岩間(2005a: 53)の「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.1」においても、ジェネラリスト・ソーシャルワーク、ジェネリック・ソーシャルワーク、ジェネラリスト実践等の用語の幅を指摘し、「結論からいえば、国内外の文献を見渡してみても、現時点で必ずしも厳密な定義や基準をもって用いられているとは言い難い。」とされている。こうした状況は、今日においてもそれほど大きく変化していないといえよう。ジェネラリスト・ソーシャルワークの概念については、その境界線について共通の合意が得られた明確な線引きがされているわけではない。また、特にジェネラリスト・ソーシャルワークと断っていないとしても、単にソーシャルワークという言葉でジェネラリスト・ソーシャルワークの枠組みにのっとった解説をしているテキストも多い。こうした点から考えると、ジェネラリスト・ソーシャルワークは、今日でも明確な定義に基づいて論じられているとはいにくい面があることは否定できない。

そもそも、ジェネラリスト・ソーシャルワークは、ソーシャルワーク統合化の潮流において、試行錯誤の中で生み出されてきた枠組みである。岩間による、「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク」と題する『ソーシャルワーク研究』誌上での一連の解説記事¹⁾は、ジェネラリスト・ソーシャルワークの成立過程や枠組みの特徴を網羅的に理解する上で助けとなる資料である。岩間(2005a: 54-56)によると、ソーシャルワークの方法として発展したケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガニゼーションの主要な三つの援助方法の統合化は、それらを単純に合体させたコンビネーションアプ

ローチ、各方法論に共通する原理や技術の抽出を図ろうとしたマルチメソッドアプローチ、確立した共通基盤の上に三つの援助方法をとらえ直そうとするジェネラリストアプローチを経て、エコロジカル・ソーシャルワークの流れをくみながら体系化されたこととされる。「『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』とは、概ね1990年代以降に確立した現代ソーシャルワーク理論の構造と機能の体系」(岩間 2005a: 53)であり、「現代ソーシャルワーク理論の特質が色濃く反映したものとなっている」(岩間 2005a: 53)という特性があると評価される。また、『ソーシャルワーク基本用語辞典』によれば、「ソーシャルワークの統合化によってもたらされた一体的なまとまりをもつソーシャルワーク理論であり、統合化によって提示されたジェネラリスト・アプローチがさらに進展したものである。」(日本ソーシャルワーク学会 2013: 84)とされている。こうした解説を踏まえ、ここでは、ソーシャルワークの主要なルーツであるいわゆる三分法を融合する取り組みの統合化に向けた試行錯誤を経た今日の到達点であり、未だ定義においてあいまいな部分が残るものの、ソーシャルワークの代表的な理論に位置するのが、ジェネラリスト・ソーシャルワークであるととらえることとする。

2. ジェネラリスト・ソーシャルワークにおける展開過程

副田は、ジェネラリスト・アプローチの特徴として「①問題理解の視点：エコロジカル・システムティックな視点、②援助過程：問題解決過程、③援助過程の原則：クライアントとのパートナーシップ、④援助の原則・種類：必要に応じた幅広い複合的な介入援助、⑤援助の目的：クライアントの問題解決、クライアントの社会的機能の回復・促進・強化、環境システムの変革」の5点をあげており、「援助過程：問題解決過程」については、「情報収集とアセスメントにもとづいた問題の確認、解決に当たっての目標作成、計画目標にもとづく課題の実行、その評価、というように計画的に援助過程を進めていく。」援助の進め方のことであるとする(副田 2005: 135-136)。「ジェネラリスト・アプローチがさらに進展したものがジェネラリスト・ソーシャルワークであるといわれているため(日本ソーシャルワーク学会 2013: 84)、統合化が深化する中で、こうした展開過程は、ジェネラリスト・アプローチからジェネラリスト・ソーシャルワークに継承された特徴的な要素の一つといっていだろう。方法論の統合化を模索するにあたって、対象者

の置かれた状況をトータルに理解する視点、生態学やシステム論の知見の影響を受けて体系化されてきたものがジェネラリスト・ソーシャルワークである。クライアント・システムを、全体として把握することを可能とする情報収集とアセスメントを含む問題解決過程のあり方自体が、ジェネラリスト・ソーシャルワークを特徴づける重要な要素であるといえる。

Ⅲ. 展開過程の特徴と構成要素のバリエーション

1. 展開過程の特徴

ソーシャルワークは、一般的にはイメージとして捉える事が難しい活動であるといえよう。ソーシャルワーカーの援助内容・活動分野は多岐にわたり、またその一部には外部から見た限りでどのような意図でしていることなのかすぐには理解しにくい行動も多い。それに、ある一回の面接に、関係作り、情報収集、心理的な支援の提供など、複数の要素が混在している。また、時間の経過によって場面ごとに重要視される内容も変化する。さらに、計画に沿って援助を展開していくなかで、再度アセスメントにもどって新しい情報を収集し検討する必要性が出てくることもある。ソーシャルワークの展開過程がとらえにくいのは、可視化しにくく一本調子で実施されるのでもないその特性が大きく影響しているといえる。

中村(1999:84-85)は、ジェネラル・ソーシャルワークの過程の特徴として「①過程は、すべての実践アプローチにとって必要不可欠な構成要素である、②過程は、ソーシャルワークの問題解決とクライアント・システムの変容・成長を目標にした行為の積み上げである、③過程は、時間的変化と力動的活動を伴い、それは、常に直線的ではなくフィードバック機能を用いた援助システムを構成する、④過程が焦点化するの、活動そのものでなく活動を継続していくことである、⑤過程は、ソーシャルワークの問題解決に応じたいくつもの局面をもち、それぞれに変容するための手続きや行為を提供する」という5点をあげている。また、「過程は、ソーシャルワーク実践そのものであり、各局面の手続きや手順、あるいは行為に規定されるだけでなく、時間的流れと力動性を伴った援助システムである。」(中村 1999:85) ととらえ、ジェネラル・ソーシャルワークにおいて過程がとりわけ重要な構成要素であることを強調している。過程は、実践者が行う「活動そのもの」を説明するものであるため、ソーシャルワークの本質を反映する大変重要な部分であるこ

とは指摘の通りである。また、「行為の積み上げ」であるというように、実践者が行う様々な活動の集積が全体を作ることで、他の文献でもしばしば指摘される「フィードバック」と呼ばれるシステム論の視点からいう行動の結果に対する反応に基づく調整を含み、「単純に一直線に進展するものではない」ことも、ソーシャルワークの展開過程の特徴として様々な文献で広く言及されている点である。

こうしたプロセスについての特徴は、根底にある本質は変わらないものの、表現の仕方・描写の仕方は文献ごとに異なり、多彩である。『ソーシャルワーク基本用語辞典』では、「行きつ戻りつしながら螺旋状に進展する」とされる(日本ソーシャルワーク学会 2013:144-145)。また、Mattainiら(2007:23)は、ソーシャルワーク実践を「非線形(nonlinear)であるが、成り行き任せ(random)でも無秩序(chaotic)でもない。」と描写している。Comptonらによれば、ソーシャルワーク・プロセスとは「問題解決にあたってワーカー—クライアントがとり結ぶ協働的關係の発展を含む継続的で統合的な全体」であり(Comptonら 2005:4)、それを「幾分人為的に段階とか局面に分割することはできるし、そうした見方は参考にもなる」ものであり、それらは「『螺旋状(spiral-like)』であると見ている」と述べている(Comptonら 2005:4)。Johnsonらは、「そのプロセスは本質的に円環的」であり(Johnsonら = 2004:349)、「4つの段階のすべてが常に呈示されるが、取り組みにおけるさまざまな点でひとつ以上の段階に焦点が当てられ、最も関心が向けられる。」(Johnsonら = 2004:349)²⁾と描写し、それは「4つのすべての段階は相互作用のプロセスとしてだけでなく、介入のための構成要素となる。環境におけるクライアントとシステムとの間の交互作用の変化にすべての段階が影響を与えることができる。個人と社会システムの社会的機能にすべての段階が影響を与えることになる。」(Johnsonら = 2004:349-350)³⁾とも指摘している。

こうした指摘に見られる「螺旋状」「円環的」「非線形」という表現は、具体的にはどのような点を特徴としていっているのか、踏み込んで考えてみたい。上記の引用した特徴について、それぞれの文献に詳細な説明があるわけではない。自然に読み取れる意味としては、ソーシャルワークとは「一直線に展開されるものではない」という点、「一度経た段階に、再び戻ることがある」という特徴をいっているのだと理解できるが、ポイントとして

は、「後退する」といっていないことではないだろうか。螺旋であれ、円環的であれ、展開過程は常に「前に進んでいる」のであって、例え「アセスメントからプランニング、インターベンションを経て再びアセスメントに戻る」ことがあったとしても、「逆戻り」するのではなく、常に進展しながら、巡り巡ってもとの段階に舞い戻ることがあるという特徴を描写しているものと考えられる。

プロセスを構成する各段階の区分についても、興味深い指摘がある。Gittermanらは、ソーシャルワークのプロセスは、ライフモデルが捉えようとした対象としての人の生活自体と同様、位相性がみられる点、個別的・環境的な力の相互作用に応じてみちたりひいたりするものであり、現実の実践においてはそれぞれのフェーズをいつも明瞭に区別できるものではない点などについて指摘している(Gittermanら 2008:137)。Bogoによれば、「援助プロセスはシステムティックで段階を経るもの、援助局面に対応したものと考えられている。それは、ワーカー・クライアント関係が行き当たりばったりでも適当なものでもないことを示している。」とし、ゴール達成のための方向性やガイドラインを提供するものであるとしている(Bogo 2006:137)。

このように、ソーシャルワークの展開過程には、どのような実践活動にも適用しうる体系的な枠組みであり、フィードバックであれ、非線形であれ、螺旋状であれ、どのような表現がされるにしろ、単調な進行過程をとらないこと、構成要素が網目のような相互関係を取り結んで有機的に結合して全体を構成していること、実際の活動においては局面の区切りは必ずしも明瞭でないことなどが、先述したソーシャルワークの展開過程をとらえにくさにつながっているようである。しかし、それは同時に、人の生活という無数の変数から形成される複雑な構造の対象へと働きかけるのに用いられる枠組みにとって、不可欠な特徴であるという側面も見逃すことはできない。シンプルな枠組みであれば、説明しやすく理解しやすいだろうが、援助の対象者がおかれた状況は複雑で、援助活動も様々なレベルにおける複雑な取り組みとなる以上、ソーシャルワーク実践の援助過程の特徴を備え複雑で有機的な理論となることは、自然であるといえる。

2. 展開過程の構成要素

ソーシャルワークの展開過程は、いくつかの構成要素から成り立っている。こうした構成要素は、「段階(stages)」や「局面(phases)」などといわれる。文

献によって展開過程の構成要素を段階といたり局面といたりしているが、ここでは基本的には構成要素をさす言葉として区別せずにとらえている。また、先に触れたように、これらは本来現実の実践場面においては有機的に結合し、常に相互に影響を及ぼし合い、時にはすでに経過した段階に戻りながら進展するため、完全に個別に切り離して考えることはできない。ここでは、「ソーシャルワークの展開過程を説明しやすくするために便宜的に切り分けた部分であり、プロセスを形成する構成要素である」として、それらを捉えることとする。以下、いくつかの文献でソーシャルワークの展開過程がどのような段階から構成されると説明されているのか、まずは概観してみよう。

ジェネラリスト・ソーシャルワークの原型である、ジェネラリスト・アプローチにおいて、ジェネラリスト・ソーシャルワークの一般的な展開過程の枠組みは、すでに体系化されていた。副田(2005:147)は、ジェネラリスト・アプローチの援助過程を「問題解決過程に沿って目標をきめ計画的に援助を進めていく過程である」とし、「①情報収集とアセスメント、②目標の計画作成、③計画の実施、④評価、⑤終結という位相で進む。」と解説している。

『ソーシャルワーク基本用語辞典』では、「ソーシャルワーク・プロセス」の項目についての解説の中で、次のように記述されている。「ソーシャルワーク統合化以降、ソーシャルワーク・プロセスは一般的に8つの局面から成るとされている。①インテーク(受理面接:クライアントのニーズ、ニーズと機関が提供するサービスとの整合性、クライアントのサービスを受ける資格の有無を明らかにする局面)、②アセスメント(事前評価:情報収集を行いニーズをより詳しく把握する局面)、③プランニング(目標設定と計画作成:ニーズが充足された状態を示したケース目標を立て、その目標を実現するために行うべき援助計画を作成する局面)、④インターベンション(介入:援助計画に基づき介入を行う局面)、⑤モニタリング(援助の効果測定:ケース目標の達成の程度とそれが援助によるものかを測り、目標の再設定、援助計画の見直しを行う局面)、⑥エバリュエーション(事後評価:目標が達成されケースを終結できるか決定する局面)、⑦終結(援助が必要なくなったと判断された場合、援助関係を終わらせる局面)、⑧フォローアップ(追跡調査:終結後一定期間、問題の再発、新たな問題の発生の有無を調査し、必要な場合は再び援助につ

なげる局面)」（日本ソーシャルワーク学会 2013:144）である。

岩間 (2005b:51) による「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.3」では、ジェネラリスト・ソーシャルワークの援助過程としてとりあげられている「アセスメント、プランニング、アクション、エバリュエーション」の4つの要素である。

中村 (1999:86-114) によれば、ジェネラル・ソーシャルワークの展開過程は、①最初のかかわりと問題の把握（エンゲージメント）、②アセスメント、③計画策定とインターベンション、④評価と終結、として説明されている。

日本において広く教育に使われている社会福祉士養成のテキストでは、どう解説されているであろうか。中央法規出版の『新・社会福祉士養成講座7 相談援助の理論と方法I 第2版』（社会福祉士養成講座編集委員会 2010:94）では、「ケース発見→受理面接（インテーク）→問題把握、ニーズ確定、事前評価（アセスメント）、支援標的・目標設定→支援の計画（プランニング）→支援の実施→モニタリング→終結」と解説されている。また、各段階は「実際にはこの順序どおりに進むわけではなく、渾然一体となっていたり、アセスメントして新たな問題が把握される場合もある。」（社会福祉士養成講座編集委員会 2010:94）とされている。

Johnsonら (= 2004:349-351) によるジェネラリスト・ソーシャルワークのプロセスについての解説では、「そのプロセスは、アセスメント、プランニング、援助活動、終結という4つの主な構成要素から概念化される。」とされる。ここでは、4つの段階とはっきり述べられているが、「図1 ソーシャルワーク過程」では、アセスメントから終結まで矢印で結ばれた一連の過程とは別に、4つの段階どの局面からも矢印で結ばれる「評価」を加えた枠組みとなっている（ただし、「アセスメント」と「評価」、「終結」と「評価」は双方向の矢印、「プランニング」から「評価」、「援助活動」から「評価」へは一方方向の矢印である）。Johnsonらによる『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』の改版では、9th ed. (Johnsonら 2007:185-186) でも10th ed. (Johnsonら 2010:171-172) でもこの「4つの構成要素+評価」の枠組みが基本的に踏襲されている。ただし、10th ed. では、「プランニング」と「評価」、「援助活動」と「評価」の間も、双方向の矢印とされている。

Gittermanら (2008:137-138) によるライフモデルの枠組

みでは、実践は preparatory, initial, ongoing, ending の4つの局面 (phases) からなる、大まかな区切り方をした要素の集合体として描写される。これらは、いわば「準備フェーズ」「初期フェーズ」「進行フェーズ」「終結フェーズ」とでもなるだろうか。

Bogoは、ソーシャルワーク実践に関するいくつかのテキストを踏まえ、プロセスを構成する段階としては概ね「Preparatory stage, Initial stage, Middle stage, End stageの4ステージ」に集約されると述べている (Bogo 2006:138-139)。

Mileyらは、エンパワーメントを重視するジェネラリスト・ソーシャルワークの解説において、エンゲージメント（ダイアログ・フェーズ）、アセスメント（ディスカバリー・フェーズ）、インターベンションおよびエバリュエーション（ディベロップメント・フェーズ）を通じて実施されるものとして、プロセスの各局面を描写している (Mileyら 2013:103-104)。彼らの枠組みでは、ダイアログ・フェーズは「パートナーシップの形成」「状況の明確化」「方向性の決定」を内容とし、ディスカバリー・フェーズは「ストレngthsを見出す」「利用可能な資源の調査」「解決に向けた枠組みの形成」を内容とし、ディベロップメント・フェーズでは「資源の活用」「協働」「機会の増加」「成功を認める」「成果の統合」を内容として含むとされる (Mileyら 2013:104)。特に、エンパワーメントを指向しているため、プロセスにおいてもクライアントの強みを引き出す活動を強調している印象がある枠組みである。

Timberlakeら (2008:157-462) のジェネラリスト・ソーシャルワークの実践枠組みでは、エンゲージメント (Engagement)、情報収集 (Data Collection)、アセスメントと援助計画についての契約 (Assessment and Contract Planning)、(マイクロ・メゾおよびマクロでの) インターベンション (Intervention)、エバリュエーション (Evaluation)、終結 (Termination) という局面の区切り方で説明している。

これらの展開過程についての共通点と違いがよくわかるよう、段階の区切り方を [表・1] にまとめて再掲載した。ここから、段階の区切り方、段階の構成要素でみると、興味深いことが分かる。段階の区切り方については、Mileyら (2013:104) の3区分から、日本ソーシャルワーク学会 (2013:144) の8区分まで様々であるが、Gittermanら (2008:137-138)、Bogo (2006:138-139)、Mileyら (2013:104) とその他とでは、区切り方に大き

[表・1 ソーシャルワーク展開過程のバリエーション]

著者	展開過程の分け方
副田 (2005: 147) (ジェネラリスト・アプローチ)	情報収集とアセスメント 目標の計画作成 計画の実施 評価 終結
日本ソーシャルワーク学会 (2013: 144)	インテーク アセスメント プランニング インターベンション モニタリング エバリュエーション 終結 フォローアップ
岩間 (2005 b: 51)	アセスメント プランニング アクション エバリュエーション
中村 (1999: 86-113)	最初のかかわりと問題の把握 (エンゲージメント) アセスメント 計画策定とインター ベンション 評価と終結
社会福祉士養成講座編 集委員会 (2010: 94)	ケース発見 → 受理面接 (インテーク) → 問題把握, ニーズ確定, 事前評価 (アセスメント), 支援標的・目標設定 → 支援の計画 (プランニング) → 支援の実施 → モニタリング → 終結
Johnson ら, (2010: 171-172)	<pre> graph TD A[評価] --> B[アセスメント] A --> C[プランニング] A --> D[援助活動] A --> E[終結] B --> C C --> D D --> E </pre>
Gitterman ら (2008: 137-138) (ライフ・モデル)	Preparatory phase (準備フェーズ) Initial phase (初期フェーズ) Ongoing phase (進行フェーズ) Ending phase (終結フェーズ)
Bogo (2006: 138-139)	Preparatory stage (準備段階) Initial stage (初期段階) Middle stage (中間段階) End stage (終結段階)
Miley ら (2013: 104) (エンパワーメントに焦点化した ジェネラリスト・ソーシャルワーク)	エンゲージメント (ダイアログ・フェーズ) アセスメント (ディカバリー・フェーズ) インターベンションおよびエバリュエーション (ディベロップメント・フェーズ)
Timberlake ら (2008: 157-462)	エンゲージメント 情報収集 アセスメントと援助計画についての契約 (ミクロ・メゾおよびマクロでの) インターベンション エバリュエーション 終結

* 出典は、文末の文献を参照のこと。Johnson らの内容は、10th ed. に基づいた。Gitterman ら、Bogo、Miley ら、Timberlake らの内容については、筆者が適当と思われるカタカナや訳語を当てはめて記載している。

な違いがあるように考えられる。準備期から終局までの区切り方は、援助活動の内容で分けたというより、援助活動における進展の度合いに焦点化した大まかな区切り方であるといえる。段階を捉える視点が、「アセスメント、プランニング…」といった援助活動の焦点に着目した区切り方よりも大まかで、時間的な流れをより強く意識している解釈の仕方であるともとらえることができる。段階の構成要素については、副田 (2005:147)、日本ソーシャルワーク学会 (2013:144)、岩間 (2005 b:51) 中村 (1999: 86-114)、社会福祉士養成講座編集委員会 (2010: 94)、Johnson ら (=2004:349-351)、Timberlake ら (2008:157-462) では、共通して含まれている要素と著者によって省かれているものがある。特に違うのは、「ソーシャルワークの入り口段階」についてである。アセスメントから開始するとした枠組みがある一方、アセスメントの前に「インテーク」または「エンゲージメント」の段階を入れて説明する枠組みがあった。「インテーク」としたのは、日本ソーシャルワーク学会 (2013: 144) と (インテークの前に「ケース発見」を付け加えた) 社会福祉

士養成講座編集委員会 (2010: 94) であった。どちらも日本で広く読まれる基本的文献であることが興味深い。日本では、インテークは「初回面接」「受理面接」などという訳語が当てられ、社会福祉士養成のためのテキストでは、これまでソーシャルワークの入り口段階として位置づけられてきたもので、社会福祉関係者に広くなじみのある言葉となっている経緯がある。しかし、今回レビューした外国文献では、インテークを採用している枠組みはなかった。なぜ、日本ではソーシャルワークの入り口が「エンゲージメント」ではなく「インテーク」であるという説明が採用されるのかについては、背景も含めて今後考察してみる必要がある。入り口以外では、「モニタリング」や「フォローアップ」を独立した段階として取り扱うかどうかという点についても、違いが見られた。モニタリングやフォローアップを一つの段階として取り上げる枠組みは、インテークの場合と同じく日本の文献に例が見られた。外国文献では、ではモニタリングやフォローアップといった要素をソーシャルワーク展開過程の中でどのように位置付けているのか、この点につ

いてもさらに詳細な比較検討が必要であろう。

3. 今後の課題

以上、ソーシャルワークの展開過程についての、文献ごとの共通点と差異についてまとめた。そして、いくつか今後検討すべき課題が残った。展開過程の構成要素、とりわけ入り口段階をどのように説明するのかという論点も含め、段階の区切り方をどのようにするのが合理的かという問題が改めて確認された。また、本論では比較的表層の「段階の区切り方」に着目してレビューと比較を行ったのみで、それぞれの構成要素が著者によって同じ内容の活動を指しているのかどうかといった点まで踏み込んで検討をしていない。本論では、試みた鳥瞰的な把握による大まかな比較に留めたが、その詳細な内容を含め深く掘り下げた構成要素の違いを検討しなければ不十分である。これらは、今後の課題としたい。

IV. おわりに

展開過程とは、ソーシャルワーク実践の活動が実際どのように行われるのかという、つまり実践そのものを反映するものである。どんな働きかけを、どんな手順で行うのか明確にするということは、まさにソーシャルワークという活動の本質につながる重要な要素である。

しかし、本文で述べた通り、ソーシャルワークの展開過程についての説明は現状では随分と幅がある。ソーシャルワーカーとして就職しようとする初心者や、ソーシャルワークをテキストから学ぶ学生にとっては、文献ごとの解説の違いは、さまざまな切り口でソーシャルワークを理解する助けにもなる一方、構成要素や説明の仕方の違いが当惑と混乱を生む要因になりかねないという一面も否定できない。ソーシャルワーカーを目指すものにとって、それを「どのようにしたらいいのか」明確に理解しやすい展開過程の説明が必要とされる一方で、ソーシャルワークの理論上の深化によって絶えず展開過程の説明も変化とバリエーションが生み出され続けていくことが想定できる。ソーシャルワークの展開過程を検討し直すという営みは、そうした意味で「ある時代に最も有効と考えられるソーシャルワークの枠組み」を問い続けることにつながるといえる。興味深い研究テーマである。

注

1) 一連の解説記事とは、2005年の『ソーシャルワーク研究』誌

31 (1)「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.1」～2006年の31 (4)「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.4」までをいう。本論では、特にNo.1とNo.3を参考とした。2) 3)「4つの段階」とは、アセスメント、プランニング、援助活動、終結というJohnsonらのあげた主要な構成要素のことである。これらについては、続く「2.」で詳しく検討している。

文献

- Bogo, M. (2006) *Social Work Practice: Concepts, Processes, and Interviewing*, Columbia University Press.
- Compton, B.R., Galaway, B. and Cournoyer, B. (2005) *Social Work Processes 7th ed.*, Brooks/Cole-Cengage Learning.
- Gitterman, A. and Germain, C.B. (2008) *The Life Model of Social Work Practice: Advances in theory and Practice 3th ed.*, Columbia University Press.
- 岩間伸之 (2005a)「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.1」『ソーシャルワーク研究』31 (1), 相川書房, 53-58.
- 岩間伸之 (2005b)「講座 ジェネラリスト・ソーシャルワーク No.3」『ソーシャルワーク研究』31 (3), 相川書房, 51-54.
- Johnson, L.C. and Yanca, S.J. (2001) *Social Work Practice: A Generalist Approach 7th ed.*, Allyn & Bacon. (= 2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房.)
- Johnson, L.C. and Yanca, S.J. (2007) *Social Work Practice: A Generalist Approach 9th ed.*, Person/A and B.
- Johnson, L.C. and Yanca, S.J. (2010) *Social Work Practice: A Generalist Approach 10th ed.*, Person/A and B.
- Mattaini, M.A. and Lowery, C.T. (2007) *Foundations of Social Work Practice: A Graduate Text 4th ed.*, NASW Press.
- Miley, K.K., O'Melia, M.W. and DuBois, B.L. (2013) *Generalist Social Work Practice: An Empowering Approach 7th ed.*, Pearson.
- 中村佐織 (1999)「第3章 ジェネラル・ソーシャルワークの展開過程」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館, 83-114.
- 日本ソーシャルワーク学会編 (2013)『ソーシャルワーク基本用語辞典』川島書店.
- 太田義弘 (1999)「第1章 ジェネラル・ソーシャルワークの基礎概念」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館, 9-42.
- 社会福祉士養成講座編集委員会編 (2010)『新・社会福祉士養成講座7 相談援助の理論と方法I 第2版』中央法規出版.
- 副田あけみ (2005)「第8章 ジェネラリスト・アプローチ」久

保絃章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル
心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店, 135-
157.

Timberlake, E.M., Zajicek-Farber, M.L. and Sabatino, C.A. (2008)
*Generalist Social Work Practice: A Strengths-Based Problem-
Solving Approach 5th ed.*, A&B/Pearson.